

バチスタの権威・須磨久善氏が半生本出版

「挑戦し、壁乗り越える大切さ 若者に感じてもらいたい」

心臓の一部を切り取る「バチスタ手術」を日本で初めて行うなど、世界的な心臓外科医として知られる須磨久善氏(62)が、自身の半生を振り返った小説「タッチ・ユア・ハート」(講談社)を出版した。著書では新しい手術への挑戦、患者の死や苦悩もありのままにつづった。「新しいことに挑戦し、壁を乗り越える大切さを若者に感じてほしい」と、須磨氏はこう話している。

須磨氏は兵庫県生まれ。大阪医科大学を卒業後、湘南鎌倉総合病院長などを歴任した。平成8年、心臓の筋肉が弱り血液が流れにくくなる拡張型心筋症の治療法として、心臓の一部を切り取る日本初のバチスタ手術を行った。多くの映画で医事監修を務め、自身がモデルとなった小説「外科医 須磨久善」(海



「壁を乗り越える大切さを若者に感じてほしい」と話す須磨久善氏
〔東京都渋谷区(湘南四郎撮影)〕

患者の死や苦悩もありのままにつづる



出版された「タッチ・ユア・ハート」(講談社提供)

堂尊著)はテレビドラマにもなった。

正確、迅速な手術手技で「神の手」と称され、今日の日本の心臓外科手術に大きな影響を与えた須磨氏。「最初から凄腕の心臓外科医になれるとは思わなかったが、患者さんにベストな治療ができるように」と、若い時から自分で自分の背中を押ししてきた」と話す。心臓外科手術の執刀経験は5千件を超える。

画期的な「バチスタ手術」を知ったのは6年に招聘されたイタリア・ローマのカトリック病院だった。「心臓移植ができない日本で導入すれば、多くの人が助かるのでは」。日本国内で手術への挑戦を決めた。46歳だった。

著書ではバチスタ手術に至った経緯はもちろん、日本初のバチスタ手術後に患者が死亡したこと、世間やマスコミの批判も包み隠さず書いた。「若い人たちに批判や失敗を乗り越えることの大切さを分かってほしいかっ

た」からだという。

須磨氏は2度目のバチスタ手術に挑んで成功し、手術法を日本国内に広めた。須磨氏は「挑戦」についてこう話す。

「自分がやるのが誰かのため、世のために役立つという確信を持たなければいけない。そして納得いく答えを見つかるまではどんなにづらくてもやり通す。その覚悟を持ってこそ初めて『挑戦』といえる」